

来年の共通テストは難化必至、従来の方法だけでは…

河合塾の近藤治氏が提案する受験対策

2024/3/24 09:00

河居 貴司



近藤治・河合塾主席研究員

令和4年から始まった高校の新学習指導要領を受け、来年度から新課程をふまえた大学入試となる。大学入学共通テストはプログラミングを含む新教科「情報」を加えた7教科21科目に大がかりな再編が行われる。「地理歴史」「公民」では出題科目が変更、「国語」「数学」では試験時間が延長される。新課程入試では何が問われるのか。受験生はどう備えたらよいか。河合塾主席研究員の近藤治氏に聞いた。



新課程入試で一番影響を受けるのは、大学入学共通テスト。「情報」が入試に本格登場するのが大きい。新しい教科が加わるのは、これまでなかったことだ。

試験で「情報」が必須になるのは、国立大の一般入試だけ。配点の軽重はあるが、科目別の配点割合はおおむね2%と大きくはない。受験生は、新教科に気を取られるかもしれないが、配点割合の高い主要教科をおろそかにしないことが大切だ。

ただ、新しい教科が入試に登場した意味を考えることは重要だ。試験で問うということは、入学にあたって「情報」の学習範囲を身に付けておいてほしいと考えている、という大学側の意思表示でもあるからだ。導入初年度は配点が少なくとも、2年目以降、そのウエートが高まっていく可能性はある。

新課程入試を含めた、大学入試改革の全体の流れをみると、共通テストはこれから、さらに難化していくという見方ができる。

来年の共通テストでは「数学Ⅱ、数学B、数学C」などで試験時間が延長される。これは「考えてもらう問題にする」という作問者側のメッセージとも受け取れる。易しくなることはないだろう。

大学入試センター試験から共通テストに変わり、思考力を問うタイプの複雑な問題が増える傾向になったことで、全く別のテストになってしまったともいわれる。

センター試験は良問が多く、教育関係者の評判も良かったので、共通テスト導入当初はあまりの問題傾向の変化に「やりすぎではないか」とも感じていたが、ここ数年の出題を見て考えが変わった。

これからの時代、予測できないことに、どう対応していくかが大切になる。受験でも、過去に出たものと同じ問題に答えられるかどうかより新しいタイプの設問に答えられるかどうかの方が大事になるという考え方がある。共通テストはそうしたことを問う問題になっている。

受験対策としては、教科書を読んだり、学校や塾の授業を聴いたりといった与えられたことを淡々とこなす学習をしているだけでは、なかなか点数は伸びないだろう。

ベーシックな知識を得たうえで、「入試における現場力」を身に付ける必要がある。例えば、学んだことを使って自分で問題を作る、といったプラスアルファの学習に取り組むのもよいかもしれない。（聞き手 河居貴司）

近藤治 : こんどう・おさむ 河合塾教育研究開発本部主席研究員。入試動向を分析し、情報発信を行っている。中部本部長を経て現職。62歳。

（産経ニュース、特集 教育・受験）